

國學院大學學術情報リポジトリ

中近世書簡文の謙譲・丁重表現： 「奉る」「申す」「仕る」「致す」の用法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-05-20 キーワード (Ja): 謙譲語・丁重語, 「奉る」「申す」「仕る」「致す」, 動作動詞・状態動詞, 意志動詞・非意志動詞, 候 キーワード (En): 作成者: 山田, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001629

中近世書簡文の謙讓・丁重表現

—「奉る」「申す」「仕る」「致す」の用法—

山田 潔

一 はじめに

従来の尊敬語・謙讓語・丁寧語という敬語の三分類は、近年では尊敬語・謙讓語・丁寧語・丁寧語・美化語という五分類のほうが一般的になりつつある。その中で注目されるのは、丁寧語を従来の謙讓語から分離独立させたことである。すなわち、現代語について言えば、「参る・頂く（＝「飲食する」意）・おる・存ずる・致す・申す」の6語は、話し手が自らの動作をへりくだって表現することで、聞き手を敬う敬語として捉えられ

ている。すなわち、仕手の行為をへりくだって表現することは謙讓語と同趣であるが、その動作の向かう相手（受け手）ではなく、聞き手を敬う点が謙讓語と異なる。右の6語が丁寧語化する過程には、それぞれ複雑な要因を含むものと考えられる。本稿は、謙讓語・丁寧語の観点から、中世後期・近世前期における「奉る」「申す」「仕る」「致す」の用法を概観する。

二 中世後期の謙讓語の諸相

書き言葉で敬語が頻繁に現れるのは書簡文である。以下、書

簡文集を資料として、まず謙讓語の用法を整理して行くこととする。中世後期の資料として、『戦国大名の古文書 東日本編・西日本編』（山本博文氏^{編輯} 二〇一三年 柏書房）を取り上げる。同書は「東日本編」190点・「西日本編」202点の書状を影印・翻刻ともに収める。「読み下し文」も添えられている（引用に際し東・西と略記 末尾の数字は頁数を示す）。謙讓の補助動詞としては、「奉る」「申す」「仕る」「致す」の4語が認められる。

用例数は次のとおりである。

「奉る」 31例 「申す」 122例 「仕る」 60例

「致す」 71例

「奉る」「申す」「仕る」「致す」が同一の動詞「拝見（スル）」を承ける用例が、4語の類似性を示すものとして注目される（以下、用例は変体漢文と認められる文例にほぼ限定する）。

〔拝見〕

従 又八様御書被成下候、忝奉_レ拝見候、

（伊集院忠棟書状 西393）

御状拝見申候、従是可申入之処ニ、昨晚罷着付而取紛、

（小西行長書状 西385）

先日者自是以使者申上候処ニ、御貴報忝拝見仕候、

（松前慶広書状 東13）

去年十月之貴札致_レ拝見候、（織田信秀書状 東223）
「申す」「仕る」「致す」が「進上（スル）」「拝領（スル）」を承ける用例も認められる。

〔進上〕

態斗はほり三ツ進上申候、（結城秀康書状 東157）

御注書お取進上仕候、（今川義元書状 東157）

近日出舟仕候、仍此呈一軸致進上候、（高山右近書状 西83）

〔拝領〕

然者筑前之儀、甲州_レ拝領申候間、（黒田孝高書状 西315）

最前小田原二而、御兵糧三千_レ拝領致之、又今度之万喜之城ニ

て、兵糧千俵_レ拝領仕候、（本多忠勝書状 東153）

最前小田原二而、御兵糧三千_レ拝領致之、又今度之万喜之城ニ

て、兵糧千俵_レ拝領仕候、（本多忠勝書状 東153）

〔拝見〕の用例に顕著であるが、この4語には謙讓語として

近似する性格を有する。とりわけ注目されるのは「仕る」「致す」の親近性であり、右の他に次の4語を承ける用例が認められる。

〔上進〕去冬八城表迄、一兩輩致上進、及成就申候処：普光寺・

内田九郎左衛門尉上進仕候（秋月種実書状 西295）

先日預御入魂候状、即刻鐘江紀伊介致上進、

〔立花道雪書狀 西303〕

〔乗船〕近日乗船仕候条、御懇意之通、至降景も可申聞候、

〔小早川秀包書狀 西197〕

些気分取繕候て、十四五日比可致乗船と存候、

〔小早川隆景書狀 西193〕

〔頂戴〕昨晚釜山浦罷越候処、御朱印到来候而頂戴仕候、

〔福島正則書狀 東243〕

御内書謹而致頂戴候、〔北条氏政書狀 東191〕

〔迷惑〕弥五助条々子細候得共、むけなきと思召候半与迷惑仕候、

〔九鬼嘉隆書狀 東389〕

か様二可被成儀にて無御座候、還而致迷惑候、

〔加藤嘉明書狀 西271〕

また、和文脈ではあるが、「作る」にも2語の承けた用例が見られる。

〔作る〕此うち、なかれは〔流れ場〕の事、せつかく、つくり

つかまつるへく候、〔日根野高吉定書案 東303〕

去年致作所二おゐてハ、たとひあらし候共、年貢之儀者、納

所すへし、〔井伊直政 定書 東175〕

このように「仕る」「致す」には用法上かなりの類似性が見られる。

さて、謙讓を表す補助動詞「奉る」「申す」「仕る」「致す」

の4語は、それらの支配する動詞（語幹）に上接するか下接するか観点から分類すると、上接する「奉る」「致す」と下接する「申す」「仕る」との二類に分かれる¹⁾。

まず「奉る」(31例)は例外なく必ず上接する。そのうちで「奉存候」が14例を占める。

雖便札御座候、奉啓上候、〔松前慶広書狀 東13〕

不御心置御異見奉頼候、〔九鬼嘉隆書狀 東389〕

自房州被仰届候上、奉略候、〔多賀谷政経書狀 東119〕

無御心元奉存候、〔蜂須賀家政書狀 西255〕

次に、「申す」(122例)は「奉る」と対照的で、必ず下接する。

1 来廿八日御祝言二候、則拙者御供申候、

〔藤堂高虎書狀 西269〕

2 御札拝覧申候、〔斎藤道三書狀 東251〕

3 対申晴助不存別心所、以誓句申候、…大細事共二対申晴助、

不可有表裏之儀事、〔北条氏康起請文 東185〕

cf. 奉対古河 上意様、尽未来不可存無沙汰覚悟候、

〔北条氏康起請文 東185〕

奉対 公儀、忠節之輩二被加御恩賞・御褒美度候、

(織田信長朱印条書 東2225)
4 思慮雖無余儀候、此時候間頼申候、

(諏訪頼重書状 東299)

右の用例から知られることは、「申」はその支配する動詞に直結することである。すなわち、用例3に見られるように、「奉」は「奉対古河：」であるのに対し、「申」は「対晴助申」ではなく「対申晴助」のように動詞に直結している。したがって、次の用例は「読み下し文」にもあるように、「頼み申し奉り候」とよむのが適当であろう。「奉」が「申」に上接するもの、「奉」と「申」の謙讓の度合いを考える上で、注目される。

弥御心得奉頼申候、(蜂須賀正勝書状 西253)

以上、「奉る」は支配する動詞に上接するのに対し、「申す」は支配する動詞に下接することを述べた。

次に「仕る」「致す」について見て行く。「仕る」は「申す」と同じく、支配する動詞に必ず下接し、例外がない。

本唐之人衆高麗へ加勢仕候故、弥以各迷惑之由、申来候、

(大崎義隆書状 東33)

御祓并帶五筋拝領、目出度満足仕候、(蒲生氏郷書状 東73)

就此表在陣仕、被成御書忝存候、(細川藤孝書状 西121)

態啓上仕候、(秋月種実書状 西295)

それに対し、「致す」は支配する動詞に上接する。

1 爰元於珍所致越年候、(北条氏規書状 東199)

2 御礼ニ可致伺公候へ共、右之通ニ御座候間乍略儀如此ニ候、(森忠政書状 東263)

3 早々罷下心安可致養生之由候間、忝存候、

(小早川隆景書状 西193)

4 今度致出張落居之上者、可断絶為申中心候へ共、

(尼子晴久書状 西201)

このようにして、「奉る」「申す」「仕る」「致す」を、支配する動詞に上接するか、下接するかによって分けると、「奉る」「致す」(上接)「申す」「仕る」(下接)に二分類される。それが何を意味するかを考えてみる。謙讓語と丁寧語との位置関係を考えると、謙讓語→丁寧語の順序となる。かつて謙讓語「参らす」が丁寧語「まする」に変化する、その橋渡しとして、丁寧語の用法があることを指摘した。すなわち、「謙讓語→丁寧語→丁寧語」と変化する。丁寧語の典型は「候」であり、多くは文末に位置する。一方、謙讓語の典型は「奉る」である。「申す」は用法が多様であるからひとまず措き、本文におけるこれら三語の位置関係を勘案し、謙讓語から丁寧語へ、丁寧語から丁寧語へという順序を考慮すると、本文の三語は「奉る→致す→仕る

（↓候）の順序で謙讓語から丁重語・丁寧語へと推移するのではないかと考えられる。すなわち、「奉る」「致す」（上接）は謙讓語であり、「申す」「仕る」（下接）は丁重語であると位置づけられる。ただし、「奉る」「致す」は元来ヲ格をとる他動詞であったことも関連すると考えられ、なお検討を要する。

右を「致す」に焦点を当てて説明すると、まず、「致す」は次の用例のように、尊敬「被（る・らる）」を伴うので、謙讓語と考えられる（「仕る」にはこの用法は見られない）。

只今有境目被致奉公面々、知行方乍勿論不可有相違候事、

（伊達政宗証文 東41）

実否懇切被聞届帰参之上、可被致言上候、

（竹田信玄書状 東273）

このように「致す」は謙讓語と認定されるが、謙讓の度合いは「奉る」よりは低いと考えられる。次の「奉致進上之」のように「奉る」の上接した用例が見られる。

就此等之祝儀、態捧慶書候、仍御大刀一腰・御馬一疋奉致

進上之候、（島津義久書状 西399）

また、謙讓「令」の上接した用例も見られる（「令奉」の用法は見られない）。

謹令致言上候（島津義久書状 西399）

次の用例が示すように、謙讓「令」と同位置に「仕る」「致す」「申す」が用いられているのも「令」の語性を考える上で参考になる（次節でもう一度扱う）。

態令啓候、抑去比者、為使者、条々懇切承候き、

（佐竹義昭書状 東109）

態啓上仕候、（秋月種実書状 西295）

貴札令拝見候、殊御太刀一腰・御馬一疋并縮緬五十端拝領、

畏入存候、（小早川隆景書状 西195）

貴札致拝見候、（鍋島清房書状 西341）

御状拝見申候、（鍋島直茂書状 西347）

前述の如く、謙讓語「致す」は、「仕る」と対照的に、支配する動詞に上接するのであるが、2例下接した用例が認められる。

今度伊勢前城消失、旁爰元二も人少二而、乍大儀しかと在

城可致候、（由良成繁書状 東165）

御兵糧三千拝領致之、（本多忠勝書状 東153）

右は「可致在城」「致拝領之」とあるのが普通である。しかしながら、次節で述べるように、近世に至り、「致す」が支配する動詞に下接する用例は、徐々に多数を占めるようになり、丁重語「仕る」の用法に近づいていく。

以上、構文上の観点から、中世後期の謙讓語「奉る」「申す」「仕る」「致す」の用法を概観した。

三 『芭蕉書簡集』における「奉る」「令(しむ)」の用法

前節では中世後期の謙讓語の諸相を知るために『戦国大名の古文書』を資料としたが、本節では、近世前期の「奉る」「致す」「仕る」「申す」の用法を『芭蕉書簡集』の用例に基づき見て行く。資料として、今栄蔵氏編著『芭蕉書簡大成』(二〇〇五年 角川学芸出版刊)を用いる。同書は芭蕉書簡と認められる二二九通を収める。時代は延宝9(1681)年〜元禄7(1694)年であり、『戦国大名の古文書』の時代からほぼ1世紀後に当たる。引用は今栄蔵氏の翻字文に拠るが、同氏の施された返り点・傍訓は省略する。すなわち、引用本文の句読点・濁点を取り除けば、ほぼ原文に近い形となる。

「奉る」「致す」「仕る」「申す」の用例数は左の通りである。

「奉る」 181例 「申す」 639例 「仕る」 145例
「致す」 186例

「仕る」「致す」には本動詞的用法もある(19例・32例)。また、「致す」は、仮名表記の用例(33例)を含む。「申す」は本動詞(「言う・伝えるノ意」を除いた用例数である)。

まず、「奉る」について説明する。著しい特徴は、181例のうち、「奉存(129例)」「奉頼(46例)」が多数を占めることである。

貴墨忝致拝見、先以御無為被成御座、珍重奉^レ存候(21)
如風様御方に御とめ被成被^下候様に奉頼候(60)

右以外は、『平家物語』からの引用(「いだし奉りて」91)を含め、次の5例に過ぎない。

かならずく昼前より御入来奉待候(25)類例(238)
深川大屋吉御逢候はゞ可然奉願候(85)類例(45)
明日より御番之由、御苦勞奉察候(393)

『芭蕉書簡集』について言えば、「奉る」の用法は限定されている。

謙讓を表す「令(シム)」も21例が現れるが、「奉る」と同様「令存候」が15例と多数を占める。

御噂承、珍重令存候…御思召残念之至に令存候…遠方御厚志不浅義、忝令存候(543)

この「令」の用法について、古文書の文法解説書は「婉曲」

の意とするが、疑問である。

荊米一志氏著『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』
(2015年 吉川弘文館)「意味は使役・婉曲で、「～させる」「～する(使用しても、しなくても同じ意味)」と訳す(60頁)」

佐藤孝之氏監修『近世史を学ぶための古文書「候文」入門』
(2023年 天野出版工房)「使役・婉曲を表す助動詞で「～させる」「～する」と訳します(166頁)」

右の「令」については、今榮蔵氏が「軽い謙讓に用いる書簡用語(195:544)」と説明するのが妥当であろう。「謙讓」と説明する古文書辞典も見られる。

鈴木正人氏著『戦国古文書用語辞典』(2019年 東京堂出版)「書状などに用いられ、話し手自身の動作について謙讓の意を表わす(276頁)」。

佐藤孝之氏・天野清文氏編著『近世古文書用語辞典』
(2024年 天野出版工房)「～し申し上げる、といった謙讓の表現に用いる(300頁)」

次のように、「令」の位置に、「致す」「仕る」が対応して現れるのも、今氏の「軽い謙讓に用いる」という説明が適当する。^④

御発句共書付、令感候(396)

哥仙さて、感仕申候(266)

焼蚊辞一卷相達し、感入せしめ候(224)

風情見者ありて一入辱感入仕候(578)

愚句歳旦各々御褒美之よし、令満足候(337)

土芳俳諧仕上候由、方々より申来、満足致候(405)

四 『芭蕉書簡集』における「致す」「仕る」の用法

『芭蕉書簡集』における「致す」の構文上の特徴は、中世期に見られた、支配する動詞に上接する用法は衰退し、「仕る」と同様、下接する用法が一般になってきている。書簡文の冒頭に見られる「致拝見候(16例)」「致啓上候(6例)」は旧来のままであるが、それでも1例「拝見致候」が認められる。

御芳翰辱、染々拝見致候(266)

一般語彙については、「迷惑(3例)」「推察(1例)」に上接の用例が見られるが、それぞれに下接の用例「迷惑(2例)」「推察(2例)」も見られる。

折／＼持病疝氣音信、致迷惑候へ共、臥せり申程之事は無

御座候(336) 類例(526:537)

折／＼指出候而迷惑致候に付、盆後閉閑致候(436)

時分柄御難儀、氣之毒致推察候 (258)

類例 (194)

今としは漸々色香しほらしく、御慈愛之ほど推察致候
(459) 類例 (368)

上接する語としては、他に「拝吟 (21)」「帰帆 (238)」「対顔 (527)」「非番 (261)」が見られるだけである。それゆえに、構文上は「仕る」に近い性質を有することになる。それは、「致す」が丁重語「仕る」に近似することを意味する。したがって、次に問題とすべきは、「仕る」との意味用法の相違である。

二語は「拝領」「進上」「上進」「乗船」「頂戴」「迷惑」など支配する語を多く共有することを、第二節で指摘した。『芭蕉書簡集』においても、次の二字漢語(和語を含む)を共有する。これらに両語が接続した場合の相違が問題となる。

案内 一宿 暇乞 延引 感吟 感心 帰帆 休息 啓上
在宿 出庵 賞翫 上京 推察 相談 対面 逗留 難儀
拝見 返翰 発足 保養 迷惑

まず、順序として「致す」「仕る」がそれぞれ独自に使われている用例を調べ、両語が基本的にどのような異なるか見当を付けることから始める。「致す」独自の用例には次のようなもの

のが見つかる。

安堵いたし候 (305) 越年いたし (85) 大笑ひいたしく
らし申し候 (515) 覚悟致候 (527) 学間致候よし
(483) 合点致候へ共 (526) 帰庵可致候 (85) 発句
吟味致候へ共 (288) 口過いたし候由 (224) 工夫致
候 (40) さまぐ苦勞いたし候へば (177) 還俗致たる
もの (333) 見物可致候 (113) 愚案に而興行致候
(576) 当分何から建立可致やら (105) 参宮いたし
(85) 持参可致候 (235) 支度いたし候 (85) 下見不致
には (527) 失念いたし候 (79) 住居致候 (357) 追
付出庵いたし (194) 少々退屈いたし候 (180) 宗吾
無事達者被致候 (133) 湖水元旦之眺望可致 (259)
逗留可致候 (133) 拙者などとんちやくいたすはづに而
も無御座候へ共 (74) 当年はしゐて俳諧・発句不致候
(357) 歩行致候て (498) 満足致候 (405)

右の主語(仕手)は概ね芭蕉(書き手)であるが、第三者が主語(仕手)であるものも交える。共通点は、上接語(動詞語幹)の自他(おおむね意志動詞)を問わず、主語(仕手)の行為として完結していて、その行為が書簡の相手(読み手)に直接関わることはないことである。すなわち、「致す」は、現代

語と同様、書簡の相手（読み手）に対し、丁重の意を示したものである。

「仕る」独自の相接語には次のような用例が見つかる。

感入仕候（578）明日参上仕度奉存候（153）進上仕候（240）進覧仕候（580）一入大悦仕候（213）頂戴仕候（575）高橋殿与内談仕（178）拝覧仕候（153）路通が披露仕候間（214）無音仕候共（445）返翰可仕候（473）重而返状可仕候（49）

右は、主語が芭蕉（書き手）もしくは芭蕉の側に属する者であり、その行為の受け手（読み手）が書簡の相手もしくはそれに属する者である点が共通する。「致す」の場合、その行為が書簡の相手（読み手）に直接関わることにないのに対し、「仕る」はその行為の受け手として書簡の相手（読み手）が関わっているのが対照的である。

以上の「致す」「仕る」の基本的な相違を踏まえて、両語に共通する語の幾つかを、次に検討する。

〔感心〕

早春、仏頂和尚へ御状披遣候を、…微細熟覧仕候処、木菟の角あるけしき〔「怒誰の発句中の語」先感心仕候上、…驚入奉存候。…（仏頂和尚）愚庵まで手をひかれて一夕御

入、大道〔「仏法」の咄し止て、俳諧に至夜半候。梅桜みしも悔しや雪の花と御申候。感心致事に候。且又正秀三つ物、扱く驚入、定而御力加候物と感心仕候

（466 怒誰宛）

怒誰宛の書簡であるが、仏頂和尚の句には「感心致」とあるのに対し、怒誰の句にはともに「感心仕」とある。「感心」の行為者（書き手）は芭蕉であるが、仏頂和尚という第三者に対しては、「致」を用い、書簡の相手（読み手）怒誰に対しては「仕」を用いている。すなわち、行為の受け手を敬う点は二語に共通するが、「致す」は、受け手が第三者である点において、いまだ謙讓語の性格を有するのに対し、「仕る」は、受け手がとりもなおさず、書簡の相手（読み手）である点において、丁重語の性格を有する。

「感心仕」は13例現れるが、書簡の相手がとりもなおさず「感心」の相手である点が共通する。「感心致」は右を含め3例現れる。2例は書簡の相手が「感心」の相手になるが、昵懇の弟子其角・杉風に宛てたものである点が注目される。

貴翁御発句感心仕候（木因宛 35）

此度又御句あまた、感心仕候（曲水宛 564）

処く風景御作為、感心いたし候。たびにては句も出難も

のにて候に、おかしき句共出候而、感じ申事に候

(113 其角宛)

如此あるべき時節なりと大手を打て感心致候

(527 杉風宛)

右の曲水宛書簡は全て(5例)「仕る」で終始しているのに
対し、其角・杉風宛書簡は、全て「致す」(5例・8例)が用
いられているのは、親疎による両語の遣い分けを示すものと言
える(身分の高下・親疎による両語の遣い分けについては後に
触れる)。

〔暇乞〕

二郎兵衛も(亡母の弔いのために)暇乞致度よし申候故、早々
下し候。様子は直面に御聞可被成候(519)

昨日立ながらに(「ほんの少しの間でも」御いとまごひ可仕
と朝から心がけ申候へ共：晩方に成候故、是非なくやめ申候
(428)

前者は、二郎兵衛が私(芭蕉)に「暇乞」を申し出たの意で
「致す」が用いられている。後者は芭蕉が許六にである。「御
いとまごひ」という物言いから知られるように、芭蕉が許六に
対し、へりくだった態度を示している。

〔相談〕

文集(「『猿蓑』所収予定の文集」の事も、追付上京いたし
候間、染々相談可致候間、何角をも暫御とゞめ候半と推察申
し候(235 凡兆宛)

追付其元へ(「続猿蓑」の草稿を)上せ可申候間、序文早々
御こし可被下候。いかやう共可致相談候(去来宛 550)

乙州上京、鼓之事、其外にも御相談仕度旨御座候由、

明日御立可被成之旨、後刻貴面御相談可仕候
(凡兆・去来宛 252)

十八日は終日在 兎角貴面御相談仕候はゞ、すみやかに埒明
可申候間、(許六宛 382)

「致す」が2例、「仕る」が3例現れる。「致す」の場合は、
芭蕉が『猿蓑』所収予定の文集や『続猿蓑』の草稿・序文につ
いて、凡兆・去来と、いわば協議したいと述べているのに対し、
「仕る」の場合は3例ともに「御相談」とあるのが特徴である。
すなわち、「御相談」させていたきたい・御教示に預かりたい
という意味合いで用いられている。へりくだった態度を示して
いるのは「御いとまごひ」の場合と同じである。

さて、次の「延引」に関しては、「致す」が自発的意志を表
すのに対し、「仕る」は状況に基づく判断・意志を表すという

両語の新たな相違が見えてくる。

〔延引〕

1 尤見舞申度候へ共、却而さばりに成可申候間、延引可致候
(118)

2 先以来来氏方病人いかゞ。度々御尋申も且は物にまぎれい

かゞと、延引いたし候(235)

3 尚々市右衛門様へ可然奉頼。此度狀數多、延引仕候(171)

4 大かたは十五六之間御見舞可申上候。雨天雨風に御座候

はゞ、又々延引可仕候(395)

右は、用例1・2の「延引」が自発的意志に基づくのに対し、

用例3・4は、現状では「延引」せざるを得ないという判断を示している。すなわち、用例1は、御見舞したいけれども、か

えって御迷惑になるだろうから、あえて順延するつもりです、

の意である(用例2も同意)。一方、用例3は返信を要する手

紙が多いので、やむをえず返事を出し遅れておりますの意。用

例4は、一五日か一六日に訪問する予定であるが、当日が雨天

の場合は、不本意ながらさらに日延べせざるを得ないの意であ

る。

右のように、「致す」が自発的意志に基づくのに対し、「仕る」は状況によりそうせざるを得ない判断・意志を表すという相違

は、本動詞「致す」「仕る」にも認められる。

1 愚句、閉口(「近頃口を閉ざして」、一句も不致覚悟に存候へども)(340)

2 分限相応之(「能力相応の」心につとめたる句どもいたさせ候)(171)

3 世上を悪み候而、当年はしゐて俳諧・発句不致候(357)

用例3「当年はしゐて(「あえて」俳諧・発句不致候」は自発的意志を表す「致す」の典型的用法と言える。

「仕る」の用例は左の如くである。

1 此度の出京滞留、暑気につかれ候而俳諧一句も不仕候
(188)

2 いまだ気分も不勝、…発句もしかゝ得不仕候(557)

3 拙者も持病さしひき折々にて、しかゝ不仕候故(235)

用例1「暑気につかれ」たので、「俳諧一句も不仕(「作ろうとしてもできなかった」)の用法は「致す」と対照的である。

このように「致す」が自発的・積極的意志を表すのに対し、

「仕る」は消極的意味合いの用例が目立つが、しかし、次の用例のように、肯定的な意味合いを含むものも認められる。後者は木因宛の書簡であるが、「あなたさまのおかげで」の意味合いを含むものであろう。

九日に大坂へ参着、道中に又右衛門かげにて（＝付き添つてくれて）さのみ苦勞も不仕、なぐさみがてらに参つし申候（554）
方々一見仕候而（＝諸処見学することができました）、此度帰庵に及申候（44）

このように、「致す」に比して「仕る」は受け手を何らかの意味で意識する場合に用いられることを見て来た。したがって、身分関係で言えば、「致す」がほぼ対等の、親しい関係において用いられるのに対し、「仕る」は身分が上の、改まった関係において用いられるとほぼ結論付けられる。その観点から、書簡の宛名を基準に二語の使用数を、A「仕る」が多数 Bほぼ拮抗 C「致す」が多数 のように整理すると、下表のようになる。⁶⁾

三類のうち、主だったものについて説明する。まず、Aの、中尾（槐市）・浜（式之）の両名に宛てた書簡（3通）には、6例・10例・1例と全て「仕る」が用いられている。藤堂家家令という身分を意識してのものであろう。その中には、次のように「致す」が適当であろうと考えられる用例も交えるが、「仕る」を用いているのは丁寧な態度を示したものと考えられる。

A 中尾源左衛門・ 浜市右衛門（両名宛）			致す			仕る		
松尾半左衛門	菅沼曲水	森川許六	7	5	2	14	25	7
藤堂家家令	芭蕉兄	膳所藩重臣	17					
芭蕉	彦根藩士							
B 怒誰			8			3		
木因	凡兆		5	4	8	8	3	3
芭蕉と親交あり								
C 去来			15			4		
杉風	曾良		15	28	11	4	3	2
蕉門の昵懇の俳人								

現代語の「～させていただく」と通じるものがある。

少風引候而罷有候故、今日保養仕、明日参上仕奉存候

（153）

江戸へは冬中に下着可仕奉存候間、重而御案内可申上候

（307）

Bの凡兆には「致す」8例「仕る」3例が用いられている。そのうち、元禄三年九月十三日付書簡には「致す」7例「仕る」1例が見られる。「致す」7例は次の例も含め、これまでに説

明した「致す」の用法に属する。

度々御尋申も且は物にまぎれいかゞと、延引いたし候
(235)

「仕る」1例は先にも引用したが、次の例である。「はつきり致しません↓思うに任せません」という意味合いである。

拙者も持病さしひき折々にて、しかく不仕候故、(235)
元禄三年八月十八付書簡には1例ずつ現れる。

木曾塚にてふせりながら人々に対面いたし候 (209)

職人のでしご(弟子子)、感心仕り候 (209)

前者は病床で人々に対面したの意であり、凡兆が対面相手ならば「対面仕り候」となるであろう。後者は凡兆の「職人のでしご(弟子子)」という着想を賞賛したものである(詳しくは、今榮藏氏の解説を参照せられたい。210頁)

「仕る」の残りの1例は次の通りである。「御相談」に照応して「仕る」が用いられている。

乙州上京、鼓之事、其外にも御相談仕度旨御座候由、

(凡兆・去来宛 252)

Cの去来・杉風・曾良は、日常交流のある昵懇の弟子たちであり、それゆえに書簡も「致す」を基調としている。その中で、9例見られる「仕る」の用法について、説明する。まず、去来

については、「仕る」4例のうち、2例は貞享三年閏三月十日付書簡に現れる。

芳賀一晶、老母見舞に被登候間啓上仕候：先日又預貴墨、御厚志御深切之段、誠不浅感心仕事に御座候 (57)

芳賀一晶の帰京の際、芭蕉が託した書簡で、今氏に拠れば、去来に宛てた最初の書状である。丁重な文面であり、その中に、右の2例が用いられている。

他の2例は次の通りである。

乙州上京、鼓之事、其外にも御相談仕度旨御座候由、

(凡兆・去来宛 252)

奇特千万(＝拔群の出来栄えで)、大悦仕事に御座候

(461)

前者は乙州(仕手)が去来(受け手)にという身分関係を踏まえている。後者は、芭蕉が去来から批評を求められて答えた文面である。すなわち、「大悦仕」相手(受け手)は当の去来である。

杉風宛の書簡は「致す」(28例)を基調とする。その中で「仕る」3例は次の通りである。

尚々猪兵衛・桃印、油断不仕様に可被仰付候 (160)
同名此度は殊之外力を得よろこび候而、拙者も別而大悦仕

候 (492)

猪兵衛・桃印、…ともかくも留守相守り、火の用心能仕候様に被仰付可被下候 (493)

桃印も猪兵衛も芭蕉の甥に当たる。3例ともに、勤め先の主人を意識した物言いであろう。

最後に、曾良宛の書状「仕る」2例は次の通りである。

桃印ゆがみなりににも相つとめ候よし仰被聞、大慶仕候。：

油断不仕候様に御伝奉頼候 (224)

曾良宛の書簡も「致す」が14例と多数を占める。右の書簡の前後にも4例「致す」が用いられており、書簡文の基調は「致す」である。したがって、この「仕る」は、曾良よりも甥の桃印の勤め先の主人を意識した物言いと捉えるのが適当であろう。

以上、「致す」「仕る」の相違を、二語本来の意味と語用論的用法とに分けて見て来た。

五 『芭蕉書簡集』における「申す」の用法

「申す」は639例で、4語の中で多数を占めるが、上接語の異なり語数245語のうち、A「致す」仕る」と共通する語

B「致す」と共通する語 C「仕る」と共通する語 は次の15語に過ぎない

- A 案内 延引 感吟 感心 賞翫 上京 推察
- B 吟味 工夫 推量 同道 満足
- C 進上 進覧 大悦

また、「致す」「仕る」に下接する用例も見られる。すなわち、「致・仕↓申↓候」という語順となり、謙譲(丁重)語と丁寧語の中間に位置することが知られる。

- 拙者義、参宮致申候間追付下向、万喜可得御意候 (145)
- 哥仙さてく感仕申候。かほどまで独ばたらき、大切之風雅、驚入申候 (266)

ちなみに、「申し上ぐ」も現れるが、本動詞は「言う・伝える」の謙譲語として用いられている。次の用例は、形式上は補助動詞のようにも見えるが、上接語は「御報」「御案内(『お知らせ』)」「御尋」に限定されていて、「言う・伝える」という動詞の意味を脱し切れていない。

- 1 先書御報申上候間 (102) 類例 (106)
- 2 重而御案内 (『お知らせ』) 可申上候 (307)

- 類例 (163・411)
- 3 出庵之節、郡代衆なども断も入可申かと御尋申上候へ共、

くるしかるまじくと被仰候故(200)

ただし、「尋ぬ」には「訪問する」の意もあるので、その場合は、次の用例に見られる如く、補助動詞の色彩を帯びる。

4十五日六日之間にと心懸罷有候間、かならず御尋可申上候
(394) 類例(403)

cf 来春、初夏之節、必其御地御尋可申候(79)

さて、補助動詞「申す」の上接語は、「致す」・「仕る」と共通する語の少ない反面、両語の下接しない語が多く現れる。その中で注目されるのは、状態動詞「ある・をる」・「な(成)る」に代表される所動詞である。

まず状態動詞「ある・をる」(34例)については、漢字表記「居る」が多く、今氏は適宜「ある・をる」と付訓しているが、基準は明確でない。ここでは、その問題には立ち入らず、漢字表記「居」のままとする。

34例の内訳は、a 本動詞16例 b 「て居る」3例 c 「動詞連用形+居る」15例である。

a 拙者国に居申時より不便に存候ものに而候へば(105)

b 鼻ひるにかゝりてあ申候へば(168)

c 病人保養にかゝはり居申候(403)

本動詞を含め、「居る」は、現にその状態にあるという状態

動詞として用いられている。「居る」は元来「座る」の意味の

意志動詞・動作動詞である。a 「拙者国に居申時より」も自らの意志で「国に居」たのであるが、右の「居る」はその状態がある程度存続していたものとして捉えている。その意味で「状態動詞」であり、「致す」「仕る」が下接し得ないのは、両語が元来意志動詞・動作動詞であるためと考えられる。

「居る」に関連して存在詞「有る」を承ける用法も見られる。

其内、戸伊麻の旅寝有申候間、泪を御落し被成まじく、

(223)

「(御座)有」の否定形「無御座」に下接する用例も見られる。

愈御無事に、玄端老御一家共に別条無御座申候哉。爰元相替義も無御座候(355)

このように、「申す」は、まず右のような状態動詞に下接するという特徴を有する。すなわち、非動作動詞の性格を有するという意味で、「致す」「仕る」と対照的である。

次に所動詞「な(成)る」の分析に移る。

神楽拝に一日寄合、さのみ笑ひて散く、に成申候(146)
久々書物手にふれず候へば、万おる覺えに成申候(382)
越路の雪漸々消がたに成申候はゞ、先御上京願申事に御座候(263)

尾張・いせ地にかゝりては、肩もあしも共につよく成申候

(498)

右の用例から知られるように、言語主体の意志とは無関係に、そのような事態・状況におのずから立ち至ったことを「成る」は表す。すなわち、「成る」は自動詞であるとともに非意志動詞であり、三上章の「所動詞」にあたる。次のように、「可(14例)」「まじ(7例)」を伴う用例が多く見られるが、「可」「まじ」の用法を当然と意志とに分けた場合、全て「当然」の範疇に属する。「成る」が所動詞である故である。

尚く、拙者のほり、しかとしれ不申候。大かたは秋にも成可申哉と存候(71)

偏く貴境旧里のごとくに被存候間、立帰りく御やつかひに成可申候(245)

乍去当冬は相手に可為物無御座候へば、俳諧も成申まじく候(441)

定而俳諧の御心指とは存候へども、はかく敷事も成申まじく候(492)

所動詞は「成る」が典型的であるが、他の所動詞には、文脈上次のようなものが認められる。これらに「致す」「仕る」の下接した用例は、『芭蕉書簡大成』に拠るかぎり、見られない。

痛み入り 要り うろたへ 遅なはり (考へ) に落ち
劣り 驚き入り 終り 覚え 及び 忝がり (相) 叶
ひ (こたへ) かね 聞こえ 極まり 草臥れ 心得
こまり (果て) (疾) 指出で 染み 出来(しゆつらい)
知れ 優れ 廢り 絶え 倒れ (相) 達し 辿り 力
落し 付き 募り 出来 (相) 調ひ 留まり 慰み
似 はやり (相) 見え 焼け 止み 弱り 埒明き
忘れ 煩ひ

〔要り〕出庵之節、郡代衆なども断も入(＝要り)可申かと御尋申上候へ共、くるしかるまじくと被仰候故(200)

〔劣り〕され共句の景ははるかにをとり申候(41)

〔覚え〕「咲花を折手にとまる」叩端子、又御佳作かと覚申候(70)

〔及び〕別条無之内、細く書状にも及不申候間、左様に御意得可被成候(116)

〔聞え〕京の砧、御講尺之上に而あらかたきこへ申候(41)

〔草臥れ〕草臥申候は、又其元へ立寄申事も可有御坐候(124)

〔知れ〕尚く拙者のほり、しかと知れ不申、大かたは秋に成可申哉と存候(73)

〔優れ〕少持病すぐれ申候故、一紙如此御座候(80)

〔廢り〕いまだすたり不申候だん、御うれしく存候(398)

〔絶え〕 仙台之風流、望絶申候（133）

〔募り〕 御成人わるさ日々につのり可申と奉存候（332）

〔相〕 調ひ 文集も年内には調申まじく候間、春之事に可被成候（197）

〔似〕 いづれも名残をしみ、おと、しの春深川を出る時に似申候（318）

〔相〕 見え 尚々先日御状、御発句共遂一覽候。尤珍重の句共相見え申候（543）

〔焼け〕 其元にて書申候物は御焼不被成候よし、米櫃はやけ可申にと存候（195）

〔止み〕 もしはおこりに成可申かと葉給候へば、廿日比よりすきとやみ申候（555）

〔弱り（付き）〕 当夏事之痛候而、終日平臥之くらし、老年歳々よはり付申候（433）

このようにして、「致す」「仕る」が動作動詞・意志動詞に下接するのに対し、「申す」は状態動詞「居る」「有る」・所動詞「成る」・「要る 劣る 覚ゆ 及ぶ 聞こゆ」などに下接するのが特徴である。書簡文において、「候」は「動詞連用形」をそのまま承けることは一般ではなく、「動詞連用形＋致す・仕る・申す＋候」のように、三語を介して用いられる。したがって、

動作動詞・意志動詞は「致す」「仕る」が受け、状態動詞・非意志動詞は「申す」が承けることになり、候文の「候」は三語を介して全ての動詞を承けることが可能となる。

〔注〕

〔1〕 拙論「文機活法」における「シム（令）」「イタス（致）」の用法（近代語学会編『近代語研究』25集（2025年9月刊行予定 武蔵野書院）参照。ちなみに、本稿で「謙讓」とする「令」について、永澤清氏は「日本中世和化漢文における非使役「令」の機能」（『日言語学会「言語研究」一五九号（二〇二一年三月）において、次のように述べている（本誌査読委員の御示教による）。引用するにとどめる。

本来使役を表す「S令V」構文が（他）動詞文と意味的に隣接するケースにおいて、「令」の表す使役の意が後退して単なる動詞マーカーと解釈されたものと推定される（『要旨』37頁）。

〔2〕 拙著『玉塵抄の語法』（二〇〇一年 清文堂刊）第五章第二節「玉塵抄の「まらする」の用法―丁寧語化の過程」参照。

〔3〕 他に次の二者を参照した。

日本古典文学大系46『芭蕉文集』萩野清氏校注「書簡」（一九五九年 岩波書店）

〔4〕 萩原恭男氏校注『芭蕉書簡集』（一九七六年 岩波書店）

「尊敬」と解し得る「令」も1例見られる。

筆の心、殊之外よろしく、筆人大道之筆意令工作候（『作って下さった』物と感心仕候（166）

明治期の『文機活法』（明治九年刊）にも次の用例が見られる。

芳屋以二煉瓦石一御經營被レ為レ遊大方令ニ成就金樓玉殿湧出仕候様ニ御座候趣 オンイヘヲ、レングハ石ニテ、ゴフシン、ナサレ、アラカタ、オデキ、アガツテ、マコトニ、ミゴトダト申ス、コトデアル (70オ)

室町期の『玉塵抄』においても、使役「シムル」を身分の上位の者が下位の者に用いる例がある。その場合には、使役「シムル」は尊敬の意味を含むものと考えられる。

王ノ四夷ノコトヲミナニイマシメツ、シマシムルソ (958オ)

今日吾ヒキワケテ中ヲナヲサウトアツテ前ニ二人ヲ坐セシメテ酒ヲノマシムタソ (二六29オ)

後者の用例で「坐セシメテ」と「ノマシムタ」が並置されているのが、注目される。拙著『玉塵抄の語法』第五章第一節「玉塵抄の尊敬表現―「シム」「サシム」の用法―」参照。

(5) ただし、『書札調法記』(元禄八年版 勉誠社複製) は、「致」22例中6例、『百家通用文章大全』(天保六年初刻 文久元年再刻 星雲社複製) は、「致」16例中4例がそれぞれ後置されているに留まる。テキストとしての保守性を示すものと考えられる。

(6) 今栄蔵氏『芭蕉書簡大成』の「人名索引」を利用した。芭蕉の弟子については次の三書などを参照した。

柴田宵曲氏『蕉門の人々』(一九八六年 岩波書店)

堀切実氏『芭蕉の門人』(一九九一年 岩波書店)

楠元六男氏『芭蕉と門人たち』(一九九七年 NHK出版)

(7) 江戸末期の「申す」に関しては、小松寿雄氏に精細な分析が見られる。

小松寿雄氏「夢酔独言の動作性謙讓表現 付・オル」(『近代語研究第二三集』二〇二二年武蔵野書院刊 所収)

(8) 拙論「玉塵抄」における「テアル・テキル・テヲル」の用法」(『國學院雑誌』二〇二四年六月) 参照。

(9) 本居春庭の「おのづからしかる」動詞、ロドリゲスの「絶対中性動詞 (verbo neutro absoluto)」に該当する。拙著『日本文法学の系譜』(二〇一二年 昭和女子大学近代文化研究所刊) 103～106頁参照。